頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書

アジア・アフリカにおける持続型基盤の発展に寄与する ものつくり研究の可能性

派 遣 者：金子　守恵
派遣期間：2014 年 8 月 1 日～2014 年 9 月 8 日
派 遣 先：アジスアベバ大学南オモ研究所（エチオピア連邦民主共和国）

キーワード：技法、受容、共有、物質文化の収集、展示

1. 研究課題について

アジア、アフリカに暮らす人びとは、地域の自然環境、コミュニティ内の社会関係、さらには外部との交流にあわせて、日々の生活に必要なもの（＝日用品）をつくりだしてきた。この研究では、ローカルな技術的実践とグローバルな環境変化や社会的な制度が交差する場としてのものをつくる身体（技法）に注目し、コミュニティにおける知（＝在来知）の共有と配分の過程を描き出すことによって、アジア・アフリカにおける持続型生存基盤の発展に寄与することをめざす。具体的には、①調査研究、②共同研究／協働、③研究発信の３点に留意して研究課題を遂行する。今年度は、①エンセーテの生産や消費、交換に関わる知や技法についての調査研究、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究、そして③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信をおこなう。

2. 派遣の内容

2014 年 8 月 1 日～9 月 8 日にかけて、アジスアベバ大学南オモ研究所に渡航した。今回の渡航は、今年度計画している研究活動のなかでも、①調査研究、および②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究をすすめることとである。①については、派遣者が 2008 年からとりくんできたエンセーテの繊維を利用したものつくりについて、その技法の受容過程についての補足調査をおこなうことである。②については、2013 年度に南オモ研究所のスタッフとともにおこなった３つの民族集団の物質文化の収集をもとに、南オモ研究所のスタッフが中心になって、第２回目の特別展示を計画・準備することにある。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

①については、エチオピア起源植物エンセーテ（ensete ventricosum）の繊維をつかったものつくりにたずさわる継続的なグループが確立されて３年目にあたり、(a) グループの編成やメンバーの離脱や参入についての検討、(b) 製品つくりにおけるあらたな技法の受容と共有について検討することができた。

(a) については、2012 年時点で、およそ 40 人のメンバーがおり、３つのグループにわかれていたが、その翌年にはメンバーの一部が進学のため村を離れてしまい、2014 年 8 月時点で３つのグループの総メンバー数は 25 人であった。メンバーは減少したものの、グループでの生産活動は持続的におこなっていた。

派遣者より、グループのリーダーやメンバーに対して、新規メンバーを加える方法や新たなグループ

を編成することについて問いかけをおこない、グループミーティングを実施した。メンバーたちは、新規にグループを編成することには反対で、既存のグループにより年少のメンバーを参入させることをのぞむ意見がおおかった。メンバーに進学者が増える可能性があること、グループの継続性などを考慮して、新規メンバーには 10 代前半のものが選出された。また、彼らは、すでにメンバーであったものの近親者であったり、2008 年から 2011 年までのあいだに派遣者たちが実施したワークショップに参加したことがあるものであった。

南オモ研究所＆博物館のスタッフとは、収集した物質文化や展示するための写真の選定などをおこなった。スタッフの一部は、アジスアベバを拠点にしていたため、アジスアベバでの打ち合わせをおこなうと同時に、南オモ研究所においてもうちあわせをおこなった。第１回目は、派遣者は中心になって、調査地域に暮らす人びとの協力を得ながら特別展示をおこなったので、第２回目は南オモ研究所のスタッフに中心になってもらい、特別展示の準備をすすめてもらっており、今年度の後半に南オモ研究センターで開催の予定である。

4. 目的の達成度や反省点

エンセーテの繊維製品の製作とその組織化、さらにはメンバーの技法の受容等に関して、約３年間の変遷を記録、検討できてきたので、在来の技法的な変遷やそれにともなうグループの組織的な編成や技術の受容や共有についての検討が可能になった。技術や知識は、それが人びとの組織化ときりはなされて受容されたり、変成されることはほとんどないと見なしているので、これらの記録や検討した内容は、在来知や技法の特質を検討していくうえで非常に重要なものと考えている。この点において、この研究全体の目的をほぼ達成できたといってもよいと考えている。また、展示に関しては、２回目の特別展示のうちあわせを実施することが出来たという点で、一定の達成を得られたと考えているが、派遣者が滞在中に開催ができなかったので、その点を反省点として指摘できる。

5. 今後の派遣における課題と目標

今回の渡航で、派遣者の海外の研究所への派遣はほぼ終了した。今回のエチオピアでの渡航をふまえて、2015 年 2 月には、在来知がグローバルな文脈においてあらわれるさまざまな局面について議論できるような国際シンポジウムのセッションを企画している。南オモ研究所において、第２回目の特別展示の開催の現場に派遣者が立ちあうことができなかったので、その点をセッションで反映できるかどうかは今後の課題である。また、そのセッションでは、エチオピアでの経験だけではなく、フランスやドイツでの派遣の経験も反映させることが目標であるので、その点についてのセッションの趣旨やプログラム構成について検討をすすめていきたいと考えている。

写真１　新しい技法 I：タマネギの皮をつかって繊維を赤く染める

写真２　新しい技法 II：赤い色に染まった紙

写真３　新しい技法 III: 素材の質について確認してから作業する